

満蒙開拓青少年義勇軍

満蒙開拓青少年義勇軍と言っても、恐らく何の事やら分らない人が多いであろう。

根上町で、少年の時代にそれに応募し、厳しい訓練の後満州や蒙古に渡り、当時の言葉で言えば、「王道楽土」を築く筈であった少年が福島に二人いた。そしてその目的を果たすことなく、若くして死亡した。

しかも当時、町挙げての葬儀をしながら、戦争の犠牲者として登録される事無く現在に至っている。

高塚邦男君と沖田日出男君の二人である。

満蒙開拓青少年義勇軍とは、広田内閣の二十か年に百万戸の移民計画によって始められ、満蒙移民団に次いで昭和十二年に満蒙開拓青少年義勇軍を創設し日満両国の共同国策として決定されたものであった。

徴兵以前の満十六歳から満十九歳までの少年を、実質的に国防の第一線に立たせようとするものであり、十三年からの四年間に三十一万の少年を満州に送り込む計画であった。

応募した少年達は、茨城県内原にあった、日輪をかたどった「日輪兵舎」に住み、徹底した国粹的な農本主義の教育が行われ、勤労と軍隊的な集団訓練が行われた。

その後の敗戦時には、さながら棄民となり、全員故郷に帰る事無く無念の涙を呑んだであろう、残酷極まる政策であった。

また、この勧誘には学校の教師が、家庭状況を勘案して、積極的に働いたと言う。

